

佐藤道信さんから『明治国家と近代美術』（吉川弘文館）の恵投にあずかる。「美術」という制度の編成過程を発掘して再構築する、知識社会学。これまで歴史学としての美術史学は、奇妙なまでに自己検証を疎かにしてきた。その欠落を補う、待望久しい著書だ。外国から見れば日本美術を代表する陶藝や刀剣や書は、日本の講壇美術史からは排除された。海外で浮世絵が高く評価されたのに、日本ででの学術研究はもっぱら古美術に力点を置いてきた。絵画・彫刻は「芸術院会員」なのに、伝統工藝は「人間国宝」。そうした、思えば不可思議な線引きも、実は明治以来の行政官庁間の思惑と分類闘争 *lutte de classement* の遺産であった。

美学・美術関係の講座が帝国大学に設置されたのは大正初年だが、これ以降、戦前期の学術の政治分析は、今日までなお手付かずで残ってきた。カリフォルニア大学、サンタ・バーバラ校の Hyung Il Pai さんの研究は、その禁じられた領域に光を当てた先駆的業績と言えるだろう。「過去をめぐる政治：朝鮮半島における日本考古学の遺産」（*East Asian History*, Nr.7, June 1994）を始めとする彼女の研究には、門外漢として蒙を啓かれた。角田文衛編『考古学 京都学派（改訂版）』などには、たしかに同学の学祖たちへの愛憎半ばする肖像が描かれている。だが戦前の朝鮮「併合」や大陸進出なくして、日本の東洋学の先駆者たちの業績がありえなかったことは、（あまりに当然、というわけか）声高には論じられない。逆に半島にあっては、考古学の基礎が日本人「御用学者」たちによって築かれた、などとはとても容認できる公式見解ではなかった。かくして朝鮮総督府の文化財行政や朝鮮古墳研究会の活動は、片や臭い物に蓋、片や侵略者による文化財破壊の汚名の下に、長らく隠蔽されてきた。

京城帝国大学教授、藤山亮栄も認識したとおり、たしかに、両班の儒教的価値観では無視されてきた古墳の価値を発見したのは、日本の考古学者たちだったろう。白鳥庫吉、鳥居龍三、関野貞らの先駆的な調査活動の広がり、まさに超人的。「処女地」を前にした探検家の異様なまでの学術的熱意の賜物といって語弊がない。今西龍、黒板勝美、八木奘三郎らの実地研究、さらに「併合」後の谷井濟一、栗山俊一らによる発掘報告や遺品の体系的等級付け。さらに 1916 年の「古墳及び遺物保存規定」実施にともなう朝鮮古墳調査委員会と、そこに参画した浜田耕作、原田淑人、池内宏、梅原末治、やや遅れて三上次男らによる発掘記録。それらは、朝鮮戦争による破壊以前の貴重な記録として、今日なお学術的価値を失わない。加えて戦後韓国の文化財行政が、日本式「国宝」指定を踏襲したのも、いわば公然の秘密だった。

植民地主義考古学への必然の反作用として、半島と日本を問わず、考古学者は長らく「侵略神経症」に取り付かれた、と筆者は言う。江上「騎馬民族説」も、逆にひたすら朝鮮の独自性を証明しようとする南北朝鮮の国粹主義も、同じ病の裏表だ、とのお見立て。そのうえで彼女は学問的見地から、戦前の「御用学者」の業績を再評価するのだが、そこには幾つか陥穽がある。まず、この論法は、彼らを「御用学者」ゆえに犠牲の山羊とした「日本陰謀説」の裏返しでしかない。科学性を標榜した考古学調査、という枠組みそのものが、発掘する側のされる

側への優位を正当化する支配関係と無縁ではありえない。「処女地」の開削は、事後的には「文化遺産」破壊と化す。両班が軽蔑した手工藝品に柳宗悦が民藝の「美」を発見したのも、同様の「窃盗」行為となる。考古学の眼が介入する以前には無価値だったものを、文化遺産として保存する政策は、多くの埋蔵品を破壊した「漢江の奇跡」の経済発展政策同様、政治の恣意性の現れでしかあるまい。その究極の提喻こそ、景福宮正面の光化門を撤去して建てられた、朝鮮総督府だろう。1996年の解体前には国立博物館を収容していたこのビルこそ、半島に考古学的欲望という「煩悩」を植え付けた日本帝国「文治政策」の「犯罪性」を象徴したからである。